

Katherine Anne Porter 試論

木村淳子

I

Katherine Anne Porter は、常に人間の上におおいかぶさってくる運命の力を、強く意識している作家である。運命は悪意に満ちたデモンのように、無力な人間の歩みをおしとどめ、歩みをそらし、苦痛を与え、時には息の根をさえとめてしまう。処女作“*María Concepción*”以来、Katherine Anne Porter がその作品の中で試みて来たのは、運命が人間に押しつける様々のかたちの不条理の意味を探ることではなかったろうか。彼女は Barbara Thompson によるインタビューの中で次のように語っている。

I have a very firm belief that the life of no man can be explained in terms of his experiences, of what has happened to him, because in spite of all the poetry, all the philosophy to the contrary, we are not really masters of our fate. We don't really direct our lives unaided and unobstructed. Our being is subject to all the chances of life.⁽¹⁾

Katherine Anne Porter は、いろいろな場合に彼女の運命観を語っているのであるが、彼女がこうした運命観を抱くに至ったについては、その生い立ち、つまり南部の伝統の中に育ったことと無縁ではないように思われる。“We were brought up with a sense of our own history.”⁽²⁾

2 Katherine Anne Porter 試論

と彼女は Thompson に語っている。“We” であらわされる“家族”，あるいは“家”には，それ独自の伝統と歴史があり，それはより大きなまとまりをなす南部の伝統，歴史とからみあう。こうした大きな伝統と歴史の中に組みこまれている人間の存在の意味を，彼女はかなり若い頃から意識していたように思われる。運命の前には無力でありながら，しかもなお伝統や歴史を織り出してゆく一筋の糸となる人間の存在は，奇妙な，生々しい現実感を伴って彼女に迫ってくるようである。次に挙げるのも，同じく Thompson によるインタビューの中で彼女が語っているエピソードであるが，それは彼女の短篇の一つのように美しく，真実である。そこで長くなるのであるが，そのまま引用しておこう。

I remember when I was very young, my older sister wanted to buy some old furniture. It was in Louisiana, and she had just been married. And I went with her to a wonderful old house in the country where we'd been told there was a very old gentleman who probably had some things to sell. His wife had died, and he was living there alone. So we went to this lovely old house, and sure enough, there was this lonely beautiful old man, eighty-seven or-eight, surrounded by devoted negro servants. But his wife was dead and his children were married and gone. He said, yes, he had a few things he wanted to sell. So he showed us a bedroom with a beautiful four-poster bed, with a wonderful satin coverlet: the most wonderful, classical-looking bed you ever saw. And my sister said, "Oh, that's what I want." And he said, "Oh, madame, that is my marriage bed. That is the bed that my wife brought with her as a bride. We slept together in that bed for nearly sixty

years. All our children were born there. Oh," he said, "I shall die in that bed, and then they can dispose of it as they like."

I remembered that I felt a little suffocated and frightened. I felt a little trapped. But why? Only because I understood that. I was brought up in that. And I was at the age of rebellion then, and it really scared me. But I look back on it now and think how perfectly wonderful, what a tremendously beautiful life it was. Everything had meaning.⁽³⁾

このエピソードの伝えてくれる意味の深さは、作品の中で Katherine Anne Porter が語るものと同じである。そこには、彼女が育った南部の風土があり、人間がおり、人間の作り出す伝統がある。彼女の個人的な体験が個人的なものらち内にとどまらないのは、その体験が真に個人の存在の根底にかかわり合うような意味を持つときに、かえって個のわくをつき破って普遍化されるからではないだろうか。Robert Penn Warren は、Edward Schwartz による、*Katherine Anne Porter: A Critical Bibliography*⁽⁴⁾ の序文の中で次のように述べている。すなわち、作家には二通りのタイプがある、一つは作品の中では極めて素晴らしい資質を見せてくれるのであるが、それ以外の場、手紙やエッセイ、会話などの場が与えられたときには、その“angelic personality”は消えてしまって、無味乾燥に陥ってしまうタイプ。他は、作品の中で見せてくれる素晴らしい資質が、他の場においても十分に発揮され、従って作品は彼の存在の延長であるような作家、“His work is a mere extension, in a direct and fairly innocent way, of his being.”⁽⁵⁾ である。Katherine Anne Porter は後者に属する幸せな作家である、と云っている。さきのエピソードは、Warren のこの言葉を証明するもので

4 Katherine Anne Porter 試論

あろう。“家”という一つの伝統の中に組みこまれておりながら、同時に“家”の伝統を織り出して行く人間の存在、その生まれつきによって、一つの運命に縛りつけられておりながら、人間模様の一つ一つを自らの手によって織り出して行く人間の存在——それは同時に、Porter自身が育てられた南部社会というより大きな伝統を織り出す糸ともなるのだが——の意味の深さに驚き、怖れをさえ感じた若い Katherine Anne は、後年彼女が生み出すことになる“Miranda”でもあるのだ。作品の中で Miranda や、あるいは“Holiday”のうら若い主人公“私”は彼女等を取りまく様々の伝統の重みから自由になろうとして出奔するのであるが、その試みは、すでに16才の Katherine Anne によってなされたものであったのだ。しかしながら、人生に立ちはだかる様々の重圧やくびきから逃れようとすればするほど、それ等の重みやいましめは増加する。というよりも、彼女が彼女自身である、ということによって一切は彼女の上に置かれてしまっているのであり、そこから逃げ出すすべはないのである。皮肉にもそれら一切によって彼女の存在は明確にされるのであり、それら一切をどのように受けとめ、生き抜くかによって彼女の存在の意味が規定されてくるのである。Katherine Anne Porter は、人間の上に置かれている一切を“運命”(fate)と呼ぶ。

Every once in a while when I see a character of mine just going towards perdition, I think, “Stop, stop, you can always stop and choose, you know.” But no, being what he was, he already has chosen, and he can't go back on it now. I suppose the first idea that man had was the idea of fate of the servile will, of a deity who destroyed as he would, without regard for the creature.⁽⁶⁾

Barbara Thompson のインタビューに答えて、Katherine Anne Porter は自分自身について語ってくれている。作家としての道を歩みはじめた動機について、彼女は己れ自身でありたかったからだ、と答える。そして作家の努めとは、人生の混沌の中から断片を見つけ出し、それに意味を認めることであると云う。作家が、それに面と向ったときに無意味であるような事柄はないはずであるという。反対に、個々の出来事は、自分自身や、まわりの人々に何らかの影響を反ぼすときにはじめて重大な意味を持つものである、とも云う。

The event is important only as it affects your life and lives of those around you……In that sense it has sometimes taken me ten years to understand even a little of some important event that had happened to me.⁽⁷⁾

いわゆる“Miranda stories”をはじめとして、Katherine Anne Porter の作品には、彼女自身を想起させずにはおかないような主人公の現われる作品がかなりある。William L. Nance は作品を二つのグループに分けて、 α グループ、 β グループとする。“Miranda stories”をはじめとし、作者自身の過去と、その体験を基にしたものを α グループ、それ以外のものを β グループにまとめている⁽⁸⁾。作品の総数に比して、伝記的要素の濃いものの数の多さに、あらためて気づくのであるが、それ以外の作品においても、彼女の人生に何らかのかかわり合いを持った体験が語られている。さきに引用した彼女の言葉がよく示しているとおりのことである。この点で、Katherine Anne Porter は、作品の世界と彼女自身の世界が極めて密に関連し合っている作家であることができよう。しかも、その作品の芸術的完成度は高い。作品の示している世界の拡がり、一個人としてのKatherine Anneの世界を超えた拡がりを

6 Katherine Anne Porter 試論

示してくれている。「物語は結末が知られぬ限り 語られ得ないものである。」⁽⁹⁾ という彼女の言葉は、作品の中での彼女の世界の拡がりがあるところ、彼女が人間として求めていたもののありか、を示してくれるであろう。まさしく、“The event is important only as it affects your life and the lives of those around you.”⁽¹⁰⁾ ということである。それゆえに、彼女が対峙する個々の出来事は、彼女みづからに起こったことであろうと、あるいはより間接的な体験として彼女のところに届いたものであろうと、そうした狭いわくを破って、より普遍的な相を帯びたものとして映ってくるであり、作家としての Katherine Anne Porter の目によって見すかされるときに、時間と空間を超えた拡がりを見せてくれることになるのであろう。その目は様々のかたちの不条理の背後を見とおし、隠れた真実の意味を見つけ出さずにはいない。William L. Nance は、彼女の作品に関して特記すべきこととして、主題や形式が極めて変化に富んでいるにもかかわらず、その根底に統一性が認められること、を挙げているのであるが、それを彼女の不条理の背後の真実を見とおそうとする努力によるものとしても、決して的はずれた指摘にはならないことと思う。

II

さて、実際に作品を読んで行くうちに明らかになるのは、先にも述べたとおり、作者の人生に対する非常にまじめな態度であり、事件の背後の意味を読みとろうとする努力である。運命が人間に押しつける不条理の意味を探ろうとする努力なのであるが、様々のかたちの不条理に大きくわけて二通りあることに、Katherine Anne Porter は早くから気づいていた。一つは人間の全く関知しない外側であって、人間の意志にかかわりなく、あるいはその人間の善悪にかかわりなく、突然やって来て、害を与え、苦しめるような、一種不可解な災難である。それは病気とい

う形を取ってやって来ることもあろう，戦争という，より大きな社会的な問題となってやって来ることもあろう。あるいは夫と妻という二人の人間の愛情関係の中に投げこまれた石としてやって来ることもあろう。そしてその時々テーマの設定のしかたと視点のおき方によって，より密やかで個人的な閉ざされた世界を描き出すこともあるし，より大きく，個人と社会との関係において描き出されることもある。Katherine Anne Porter は社会的意識の強い作家である，という指摘がなされることがしばしばあるのであるが，それは社会悪というかたちで人生に影響を及ぼす不条理を描き出す彼女を指している言葉であろう。“The Cracked Looking-Glass”では夫と妻の間の幸福のありかたを追求するのであるし，“Pale Horse, Pale Rider”や“The Leaning Tower”などでは，戦争の晴雲に閉ざされた世界に住む人間達の，やり場のない憤りを描き出す。“Noon Wine”では，ものうく平凡な農場の生活の中に，ある日突然あらわれた Hatch という男のために，Mr. Thompson, 別に取り立てて善くも悪くもない，平凡な農夫が，どのようにしてその存在を破滅へと導かれてしまうかを語っている。そこで，人間の外界からやって来る不条理を，外因的不条理と一応名づけておこう。これに対して，人間の内部にあって，意識するにせよ，しないにせよ，内部から人間を動かし，それによってその人間を取りまく人々をも巻きこんでしまうような不条理を，内因的不条理と呼びたい。例えばシェイクスピアの悲劇『ハムレット』の主人公，ハムレットは，その性格ゆえに彼自身とそのまわりの人々，さらにデンマーク国を悲劇的な運命へと導びいてしまう。(悲劇の発端となったのは叔父クロードィアスによる父王の殺害と，王位さん奪であった。しかしながらそれは結局，ハムレットの性格を照らし出すスポットライトとしての役を果しているだけではなからうか。)このような種類の不条理を見事に描き出している例として，“Theft”と“The Flowering Judas”を挙げたいと思う。

8 Katherine Anne Porter 試論

そこで以下に、外因的不条理を取り扱った例として“*María Concepción*”を、内因的不条理を扱った例として“*Theft*”を取り上げ、作者がどのようにこれ等二つの人生の不条理とかがわり合ったのかを考えてみたい。

1) “*María Concepción*”の場合

“*María Concepción*”は1922年に書かれ、翌23年に発表された処女作である。のちに1930年に出版された最初の短篇集 *Flowering Judas and Other Stories* に収められた。Katherine Anne Porter は発表までにこの作品を、15回ないし16回も書きなおしたという。念入りな彫琢をほどこされたこの作品は、その文体が洗練されていること、短篇小説としての趣きよりは寓話的な性格を備えていることによって特徴づけられている。物語の筋だけを追って行くと、これは若い夫婦と、たまたま夫の浮気の手となった若い娘との三角関係を描いたものであり、夫を奪われた妻は相手の娘を殺してしまうという、いささかショッキングな物語であり、しかも不思議なことには、殺人を犯した妻は誰の手によっても決して罰せられることなどなかったという話である。

さて、私たちがはじめて出会う *María Concepción* は、彼女の故郷であるメキシコの自然に似つかわしく、たくましい。彼女の裸足はしっかりと大地を踏みしめている。足にささるサボテンのとげさえ、彼女を悩ますことはない。彼女の歩みは自然のそれのように着実である。自然が時宜に適った運行を行なうように、彼女もまたその努めを果す。今彼女は夫の *Juan* と彼のボスであるアメリカ人の考古学者 *Givens* が発掘作業に従事している現場に、昼食をとどけに行くところである。その道すがら、彼女の歩みをたじろがせたりおしとどめたりするものはない。足をひもでくくられて、肩に担われた家禽達が自由になろうとして身うごきしたり、羽をばたつかせたりしても、昼食の入ったかごが、どんなに

重たく右腕にぶら下ろうとも、それらは決して *María Concepción* の歩みを鈍らせることはない。

She walked with the free, natural, guarded ease of the primitive woman carrying an unborn child. The shape of her body was easy, the swelling life was not a distortion, but the right inevitable proportions of a woman. She was entirely contented.⁽¹¹⁾

María Concepción が抱いていた満足感は、おそらく楽園におかれていたときの *Eve* の満足感に匹敵するものであったろう。つまり彼女の満足感は、彼女が自分自身の存在のどの点についても、一片の疑いをも抱いてはおらず、また抱く余地を持たなかったことに由来するからである。文字通り “She was contented.” であったのであり、それ以上でもなければそれ以下の状態にあったのでもないのである。彼女が己れの存在について確信を抱くことができたのは、彼女が信じている唯一の真の^{まこと}神の存在を確信できたからであり、その神の前で取りおこなわれた結婚の聖式によってであり、さらにこの聖なる式によって彼女に与えられた夫の *Juan* によってであった。

さて日ざかりの道すがら *María Concepción* をみたしてきた満足感は、彼女が小川にかかる橋のところまでやって来て、流れに足を浸して休息し、青い空の下につらなるはるかな山脈を見やったときに、至福の状態にまで高まって行く。作者は次のように描き出すのであるが、簡潔な文章の中になんと多くの意味がこめられていることか。

She paused on the bridge and dabbled her feet in the water, her eyes resting themselves from the sunrays in a fixed gaze to the far-off mountains, deeply blue under their hanging drift

of clouds.⁽¹²⁾

biblical な象徴がみごとに María Concepción の内面風景を浮き上がらせている。⁽¹³⁾

しかしながらこの幸福感は長続きのするものではなかった。短い休息の後再び歩きはじめた María Concepción は、村の娘 María Rosa の小屋のところにさしかかる。そこで彼女は María Rosa と夫の Juan の情事を垣間見てしまうのだ。この時から、彼女のあの確信にみちた歩みは歩調を乱してしまう。苦痛が彼女の身うちを刺し、こがし、死んでしまいたい、と思った。しかし次の瞬間頭に閃めいたのは、“Not until she had cut the throats of her man and that girl who were laughing and kissing under the cornstalks.”⁽¹⁴⁾ という思いであった。彼女はこれまで以上に仕事に精を出した。家禽をさばくためのナイフは彼女の手をはなれることはなかった。村人達との交際からは遠ざかり、その代り足しげく教会に通っては祭壇にローソクを捧げた。このような María Concepción に向って María Rosa の養母であり、まじない女である Lupe は、すべてがうまく行くように、と云うのだが、María Concepción は、“Keep your prayers to yourself, Lupe, or offer them for others who need them. I will ask God for what I want in this world.”⁽¹⁵⁾ と答える。これに対して Lupe は、“And will you get it, you think, María Concepción?”⁽¹⁶⁾ と意地の悪い問いをする。この問いこそ、あの不幸な事件以来彼女が心に抱きつづけて来た、そして必死になって答えを求めつづけた問いではなかったろうか。彼女の不幸は、その存在の意義に対して彼女自身が疑いを抱くようになったことに発しているのではなかろうか。この点において María Concepción は、“Noon Wine” の Mr. Thompson と同じ悩みを抱く、同種の人間になる。ちがいは Mr. Thompson が己れの存在を確めるために村人達の中に飛びこもう

としたのに対して、*María Concepción* は村人達から遠ざかったことである。*Mr. Thompson* はついに己れの存在の意義に疑いを抱いたまま、自ら生命を断ってしまう。が、*María Concepción* のほうは必死になって生き続けた。このような彼女の姿は、旧約聖書の中に語られている義人達の姿を想起させることになる。彼等はみな、旧約の怒りの神の理不尽な命令に従い、理不尽な要求を受け入れて生きた。子供達に見捨てられ、財産を失ない、病に侵されながら生きつづけたヨブ。彼もまた神の理不尽な要求に不平をもらしながら、何故このように苦しまねばならぬのかを問いながら生きた。あるいはアブラハム。神は、彼にその息子イサクをいけにえとして捧げよと、要求した。こうした神の理不尽な命令や要求を、神の不条理と名づけることができるなら、旧約の義人達はみな、神の不条理を生き抜くことによって、己れの存在の意義を証明したのであると云えるだろう。*María Concepción* の姿はこれ等旧約の義人達の姿と重なってくる。彼女が毎日さばきつづけた家禽は、苦しみの中で捧げたいけにえであったろう。*María Rosa—María Concepción* は *Juan* の子を産み落したばかりの彼女を殺害してしまったのであるが—もまた、こうしたいけにえの一つなのであり、しかも最大のものであったのであろう。だからこそ、*María Concepción* は、殺人の大罪を犯しながら、警察の手によっても、村人達によっても、夫の *Juan* によっても、さらには彼女自身によっても罰せられることはなかったのである。それどころか、彼女には、再び、大地と共に息づく自己が与えられたのであった。

「おわりが知られなければ物語はあり得ない。」という作者の言葉に従って、この物語の最後の部分を次に引用しておく。

María Concepción could hear *Juan's* breathing. The sound vaped from the low doorway, calmly; the house seemed to be

resting after a burdensome day. She breathed, too, very slowly and quietly, each inspiration saturating her with repose. The child's light faint breath was a mere shadowy moth of sound in the silver air. The night, the earth under her, seemed to swell and recede together with a limitless, unhurried, benign breathing. She drooped and closed her eyes, feeling the slow rise and fall within her own body. She did not know what it was, but it eased her all through. Even as she was falling asleep, head bowed over the child, she was still aware of a strange wakefull happiness.⁽¹⁷⁾

さて、“María Concepción”には、Katherine Anne Porterの他の作品にも見られるような象徴、特に biblical な象徴が盛りこまれている。至福をあらわすもの、苦しみ、犠牲をあらわすもの、それから主人公の María Concepción 自身が、旧約的人物像を具現している。さらに、この作品の中には、その後の彼女の作品に色濃く影を落すことになる死と生に関する考察が、すでに認められるのである。即ち、死によって贖われる生、たえず死の影の下にあって、それによらずしては確かめられない生である。

2) “Theft” の場合

“Theft”は、*Flowering Judas and Other Stories* の1935年版に収録された、極めて短かい作品である。William L. Nance の分類に従えば、この作品はαグループ、つまり自伝的要素の濃い作品の一つに入れられるものである。主人公は、ニューヨークで作家としての道を歩んでいる女性であり、María Concepción とは対しょう的に、知性の高い女性である。かつての Katherine Anne Porter 自身の姿をほうふつさせ

る女性でもある。この作品の中で扱われているのは、自然そのままのメキシコ女、*María Concepción* が体験した、何が何だかわからぬうちに押しつけられた、外側からの不条理ではなくて、己れの内部に在る矛盾から起ってくる不条理のすがた、といったものである。作者はこの作品において、それ自身が矛盾に充ちた人間の内部をのぞこうとする。

Katherine Anne Porter は、主人公の名前を読者にあきらかにしていない作品を幾つか書いている。“*He*”の白痴の少年“彼”であり、“*Holiday*”の若い女性“私”であり、この作品における“彼女”である。これにはいろいろな理由があることではあろうが、読者の側からただちに気づくのは、主人公に対する作者の親近の情、あるいは愛情であろう。具体的な名前を与えることによって、明確に対象化し、自己と切りはなしてしまうのは、しのびないと云ったような気持ちが汲みとられるのである。

さて、物語の主人公“彼女”は、今しがた朝の身だしなみをおえて、風呂から出て来たところである。バスローブに身をつつんで、濡れたタオルを手に居間に来てみると、昨夜から長椅子の上に置いておいた小さなバッグがなくなっていた。彼女は昨夜のできごとを思い出してみる。ここで作者は映画の *flash back* の手法を使って物語を進めて行く。彼女の回想という形式で話しは進行するのであるが、そのために作者は変化に富んだ時制を駆使する。これは“*Flowering Judas*”における現在時制の使用と同様に、読者の注目させられるところである。

Yes, she had opened the flap and spread it out on the bench after she had dried the purse with her handkerchief.⁽¹⁸⁾

昨夜はひどい雨だった。雨の中を *El* (高架鉄道) の駅まで歩いて、切符を買う金があるかどうかを確かめるために、バッグの口を開けたので

14 Katherine Anne Porter 試論

あった。そこで彼女の連想は、その時一緒であった **Camilo** に移り、さらにそこから次々に昨夜のできごとを思い出して行くのだが、その過程で読者は彼女の人柄、彼女がある対象に向った時の態度、内面の傾向といったものを知ることになる。まず **Camilo** をはじめとする友達に対する彼女の態度——であり、次には恋人に対する彼女の態度——であり、金や物に対する彼女の態度、である。そのいずれの場合においても彼女は冷静で、決して執着を見せることがない。雨の中を、**Camilo** に駅まで送ってもらいながら、彼女はこのスペイン人の、若い男の現実にはそぐわないやり方を、つい考えてしまう。お金もないのにタクシーで送ろうと云ったり、場ちがいなほどの *courtesy* を振りまわす彼の頭には、うす色の真新しい帽子がのっている。“it never occurred to him to buy anything of a practical color.”⁽¹⁹⁾ **Camilo** はそういう種類の男である。彼女は我知らず、もう一人の友達、**Eddie** のことを考えてしまう。**Eddie** も帽子を被ってはいるのだが、その帽子はいつ見ても古ぼけている、ところがそれが彼にはよく似合う。と、そこにもう一人の友達 **Roger** があらわれた。彼は帽子など被ってはおらず頭からずぶ濡れになっている。そしてコートの中のあたりのふくらんだ部分を指して、“Hat”と云う。ここで三人の男達の帽子の扱い方が、彼女に何かを感じさせることになる。Nance の言葉を借りるなら、帽子は *male sexuality* の *symbol* として使われている、ということになるが、つまり、彼女の三人に対する気持の傾斜の度合いを示しているのである。さて、これより先、彼女は雨の中を去って行く **Camilo** を見送っていたのであったが、

As she watched, he stopped at the far corner and took off his hat and hid it under his overcoat. She felt she had betrayed him by seeing, because he would have been humiliated if he thought she even suspected him of trying to save his hat.⁽²⁰⁾

彼女は、見てはならぬものを見ることによって相手を裏切ったのではないか、という怖れと、その裏切りがあまりに唐突にやって来たことにとまどいと驚きを感じてしまう。これは“彼女”のある種の潔ぺきさを示していると共に Katherine Anne Porter 自身の持つ潔ぺきさと内省癖をも示していることになりはしないだろうか。“Flowering Judas”は彼女の“裏切り”に対する関心の度合いの強さを示している作品である。“Theft”と“Flowering Judas”はこの点においても、その主人公達の内面世界のパースペクティブの類似性と共に、近い関係を持ちあう作品と考えられる。Glenway Wescott は“Katherine Anne Porter Personally”というエッセイの中で次のような興味深いエピソードを語っている。

……One day she looked up and discovered hawks hovering over the wooded-lot and the meadow, closer and closer, and it came over her with dismay that by drawing the small birds together she was simply facilitating matters for the predators. That was the underlying theme of “Flowering Judas,” the story that made her reputation in 1930, a theme of intense concern to her all her life: involuntary or at least unintentional betrayal.⁽²¹⁾

“彼女”が怖れた Camilo に対する裏切りはこの“unintentional betrayal”であっただろう。怖れは、彼女がそれと気づいた瞬間に、彼女自身をきずつけ、彼女の潔白を汚すものになってしまう。彼女の友達に対する態度の中に見られる消極性やある種の冷淡さは、彼女の敏感さ故に自分自身をきずつけることになるこの罪の意識からの自己防衛の結果である。

さて、タクシーの中で Roger は彼女の背後に手をまわす。彼女は頭をそれにもたせかける。彼女は Roger に安心してもたれかかっている。やがて Roger は Stella から手紙がきたこと、それによって彼等の間はどうまく行くことになる、と告げる。ここで彼女の彼に対する感情には、ある種のピリオドが打たれることになる。手紙と云えば、彼女もまた恋人からの手紙を受け取ったのであった。彼はその中で二人の関係をもとどおりにしようとしきりに訴えている。しかし、彼の手紙は、Roger と Stella の場合のように二人の間柄を好転させはしない。とうとうアパートの自分の部屋にもどったとき、そして濡れたバッグから手紙を取り出して読みかえしたとき、愛を求める彼の言葉が執拗に目にまつわりついて、たまらなくなった彼女はそれを破って燃してしまうからである。やがて目的地に着いてタクシーがとまると、Roger は、あと 10 セントあれば、と云う。彼女はバッグを開けて金を取り出す。Roger はそのバッグをほめてくれる。“That’s beautiful, that purse.”⁽²²⁾ 彼女は “It’s a birthday present,”…“and I like it.”⁽²³⁾ と答える。彼女はそのバッグを小脇にかかえて部屋へ上って行くが、途中で Bill のところに立ち寄ることになってしまう。今夜の彼は仕事が挫折してしまったことと、別れた妻のことで泣きごとを云っている。

I send her ten dollars every week of my unhappy life, and I don’t really have to. She threatens to jail me if I don’t, but she can’t do it. God let her try it after the way she treated me! She’s no right to alimony and she knows it. She keeps on saying she’s got to have it for the baby and I keep on sending it because I can’t bear to see anybody suffer.⁽²⁴⁾

彼女が Bill の部屋に立ち寄ったのは、彼に招じ入れられたからであった

が、彼女のほうにも立ち寄りなければならぬ必要があった。彼のためにした仕事——というのは劇作家である彼の作品に関する批評を書いたことであったが——の報酬の50ドルを、今夜こそはもらわなければならなかった。それがなければ、彼女は明日から食事にもありつけぬ事になってしまう。ところが、彼の泣きごとを聞いているうちに、我にもあらず、“Let it go, then.”と云ってしまう。こうして彼女は、友達も恋人も金も失なったのだった。すべては彼女自身の持っている過度とも見える潔ぺきさと、そこから起るところの消極性故である。そして彼女の性格が持っているこうした傾向は、Billが語った妻のすがたと、信号を待って止っていたタクシーの前を横切って行った三人の若者、二人の若い女性の言葉によってより一そう鮮明に浮び上ってくるのである。慰謝料を送らなければ訴えてやる、とおどすBillの妻、“When I get married it won't be jus' for getting married, I'm gonna marry for love.”⁽⁵²⁾と云う若い男や、“Yes, I know all about *that*. But what about me? You're always so sorry for *him*...”⁽²⁶⁾と云う若い女と、彼女の間には態度においてかなりの隔りがある。

今朝、彼女が風呂に入っていると家政婦がラジェーターの具合を見にやって来たようだった。風呂から出てみるとバッグはなくなっていた。恋人からの誕生日の贈物だった。彼女はあのバッグが好きだった。だが取りもどすためには大さわぎをして、争わなければならないだろう。それなら、“Then let it go.”と彼女は又もやあきらめてしまう。しかし、一度はあきらめたものの、非常に腹立たしくなると、彼女はバッグを取り返そうと、家政婦のところに降りて行く。もちろん家政婦は知らない、と云い張る。それなら取っておくがいい、と云い残して彼女は階段を上るが、その時思い出したのは次のようなことだった。

She remembered how she had never locked a door in her life, on some principle of rejection in her that made her uncomfortable in the ownership of things.

.....

In this moment she felt that she had been robbed of an enormous number of valuable things, whether material or intangible: things lost or broken by her own fault; things she had forgotten and left in houses when she moved; books borrowed from her and not returned; journeys she had planned and had not made; words she had waited to hear spoken to her and had not heard, and the words she had meant to answer with; bitter alternatives and intolerable substitutes worse than nothing, and yet inescapable: the long, patient suffering of dying friendships and the dark inexplicable death of love—all that she had had, and all that she had missed, were lost together, and were twice lost in this landslide of remembered losses.⁽²⁷⁾

すべて彼女が失なってしまったものが、心の中によみがえり、彼女のうちに嘆きの歌となる。そして彼女が気づいたことによって、それ等は永遠に、たしかに彼女から失なわれてしまうことになる。

やがて家政婦があとを追って上って来て、バッグをつき返し、“...it's from her you're stealing it.”⁽²⁸⁾ という言葉を残して行ってしまう。家政婦はこのバッグを17才になる姪にやりたかった。そこで盗んだのであったが、盗みを働らいたほうが、被害者を盗人呼ばわりをするこの不可解さ。彼女は冷たくなったコーヒーと、つき返されたバッグを前にして考えこんでしまう。そして気づいたのは、

I was right not to be afraid of any thief but myself, who will

end by leaving me nothing.⁽²⁹⁾

ということであった。

ここには知ることの悲劇があり、知ることを怖れることによって惹き起こされた悲劇がある。金の腦みそを持ったために悲劇的最後を遂げねばならなかった男と同じように、⁽³⁰⁾ あまりにも敏感すぎる彼女の感性は、主体であるべき彼女自身をさしおいて、彼女をトラブルに巻きこんでしまう。“Flowering Judas”のLauraと同じように、“the very cells of her flesh reject knowledge and kinship…”⁽³¹⁾なのであり、彼女の存在のすべてが、知悉することを拒否するのである。これ以上に大きな災難はないだろう。彼女はそれを訴える場所を持たないからである。彼女は生涯、それと共に生き、それ故に悩まねばならぬであろうからである。

III

Katherine Anne Porter が一まとめにして「運命」(fate)と呼んだ、二通りの不条理は、いづれも人間の意志にはおかまいなく人間を害し、大きな影響を与える。人間はどのような種類のものにせよ、その運命から逃れることはできない。それどころか、人間は運命の与える苦難を生き抜くことによってしか、己れの存在を全うすることができないのである。Katherine Anne Porter は作品の中で様々の種類の人生を描き出すことによって、どのような人生も生きるにふさわしいものであることを示してくれているのではなかろうか。こわれた鏡の中に歪んで写る己れの顔を己れの顔として受け入れることを、それによって本当のものは、その鏡の背後にあることを示してくれているのではなかろうか。⁽³²⁾

註(1) Barbara Thompson: An Interview, *Katherine Anne Porter: A Critical Symposium*, ed. by Lodwick Hartley & George Core, p. 10

なおこのインタビューは、最初 *Paris Review* XXIX (Winter-Spring), 1963 に掲載されたものである。

- (2) *ibid.* p. 6
- (3) *ibid.* p. 7
- (4) *Katherine Anne Porter: A Critical Bibliography*, ed. by Edward Schwartz, With an Introduction by Robert Penn Warren, Darby Books, Darby, Pa.
- (5) *ibid.* p. 10
- (6) Barbara Thompson: An Interview, *Katherine Anne Porter: A Critical Symposium*, p. 14
- (7) *ibid.* p. 13
- (8) *Katherine Anne Porter & the Art of Rejection*, by William L. Nance, p. p. 5—6
- (9) Barbara Thompson: An Interview, P. 13
- (10) *ibid.* p. 13
- (11) “María Concepción,” *Flowering Judas and Other Stories*, A Signet Modern Classic from New American Library, p. 7
- (12) *ibid.* p. 8
- (13) María Concepción が流れに足を浸した、という記述は、ヨルダン川でのイエスの洗礼を思い起させる。その時「これ我が愛子なり」という天よりの言葉とともに聖霊は白い鳩のかたちとなって降ったとある。あるいは、婚宴に招かれたイエスは、宴席につらなる前に、その足を洗ってもらったという。流れに足を浸すという行為の中に、天上の宴、至福の高みに上ることを許された者の象徴がある。
- (14) “María Concepción,” p. 10
- (15) *ibid.* p. 14
- (16) *ibid.* p. 14
- (17) *ibid.* p. 26
- (18) “Theft,” *Flowering Judas and Other Stories*, p. 69
- (19) *ibid.* p. 69
- (20) *ibid.* p. 70
- (21) Glenway Wescott: “Katherine Anne Porter Personally,” *Katherine Anne Porter: A Critical Symposium*, p. 26
- (22) “Theft,” p. 71
- (23) *ibid.* p. 71

- (24) *ibid.* p. 72
- (25) *ibid.* p. 71
- (26) *ibid.* p. 71
- (27) *ibid.* p. p. 74—75
- (28) *ibid.* p. 75
- (29) *ibid.* p. 75
- (30) ドーデ作『風車小屋だより』参照
- (31) “Flowering Judas,” *Flowering Judas and Other Stories*, p. 110
- (32) 拙稿 “The Cracked Looking-Glass” — 日常性の中のドラマー『北海道英語英文学』第 18 号所載参照